
cherrybrossom

茜雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

cherrybrossom

【Nコード】

N09210

【作者名】

茜雫

【あらすじ】

百年に一度生まれるとされる不吉な黒猫の少年・咲良^{さくら}はある日亡くなった養い親に酷似した白猫の少女・未来^{みらい}と出会った。嫌われ続けてきた咲良の初めての友達となった未来。しかし、運命は残酷だった。

登場人物設定（前書き）

初めての方にはネタバレになる部分もあるかも知れません。

登場人物設定

咲良 サクラ (18)

本編主人公。黒猫の少年。初めての友達で狐族にさらわれた未来を救い出すために旅に出た。しかし、世間知らずな上に超絶な方向音痴なため無事につけるか心配要素がたくさんである。今までの同族の仕打ちから他人を信じられないことがしばしばある。

未来 ミライ (16)

白猫の少女。桜の木の下で咲良と出会い、彼の初めての友達になる。容姿が『彼女』に瓜二つ。猫族の族長の娘で狐族に里を襲撃された際、連れ去られた。

『彼女』 (?)

咲良の養い親。名前、年はまだ不明。一人孤独に生きてきた咲良の唯一の家族だったが他界。

疾風 ハヤテ (23)

咲良の知り合い。狼族の青年。理由は不明であるが人間である荒獅

とともに旅をしている途中に咲良と再会。友人…というよりは弟のように咲良を気に入っている。

荒獅 アラシ (20)

疾風の相棒。男口調で格好も男物のものばかりだがれっきとした人間の女性。探し物をして旅をしている。しっかりもので警戒心が人一倍強い。

登場人物設定（後書き）

新キャラ、新しい設定ができた場合は付け足します。

序章 出会いと別れの春

今年もこの季節がやってきた。

草木が生い茂って花が咲く別れと出会いの季節、春。

彼女はそんな春が大好きだった。そういえば彼女に拾われたのも春だったなと咲良はふと思った。五年前のあの日。

彼女の大好きな春、彼女の大好きなこの桜の木の下で咲良は彼女と出会ったのだ。

たくさん話をして、名前をもらって、五年の月日を過ごし、今年の冬に彼女はその命を散らせた。

家族のいない咲良にとって彼女は本当の家族のような存在だった。彼女がいなくなった今も、咲良はここに來ることをやめない。

もう彼女はいないと分かっているけど、彼女がまたここへ來てくれる気がして咲良は今日もこの桜の元を訪れる。

いつもはここで一人猫族の里を見下ろす。しかし、今日は先客がいることに気づいた。桜の下にいる白猫の少女は小さく歌を口ずさんでいた。咲良はその歌声に立ち止まる。

少女は咲良の気配に気がつくと言をやめて振り向いた。

「誰…？」

柔らかい…けれど凜とした声だった。咲良は少女の顔を見て驚いた。

その少女はもう二度と帰ってくるはずのない彼女によく酷似していた。いや、正確には彼女の若い頃に、だ。咲良は息を呑んだ。

「あなたも桜を見に来たのね？」

少女はふわりと微笑んだ。少女の問いに咲良はぎこちなく頷く。目の前の少女が彼女ではないのだと分かっているにもかかわらず咲良にはその場を立ち去ることができなかった。

「そう、私もよ。ここの桜から里を見下ろすのが好きなの」

少女は里に目をやり、咲良に視線を戻した。

「私、未来^{みらい}って言うの。あなたは？」

「…咲良」

ぼそりと咲良が答えると未来は嬉しそうに咲良を見た。

「桜と同じ名前なのね。素敵」

「…お前「未来よ」…未来は俺のことが怖くないのか？」

振り絞るように聞いた咲良に未来はきょとんと首を傾げた。

「怖い？なぜ？」

「俺は黒猫だから…」

咲良は黒猫に生まれたがために人一倍苦労して生きてきた。

生まれてすぐに両親に捨てられ、預けられた孤児院では差別を受け

て虐待され、里の人々には石を投げつけられ罵声を浴びせられる。

すべて不吉だとされる黒猫に生まれたせいで、咲良が何もしなくても忌み嫌われてきた。

そして咲良の光だった彼女さえもう咲良の手の届かない世界に行ってしまった今、咲良は他人を信じられなくなっていた。

しかし、未来はそんなこと？といった顔で答える。

「怖くなんてないわ。黒猫だって、私たちの仲間じゃない。そうだね、お友達になりましたよう？」

一瞬、咲良は固まった。目の前の少女はなんと言ったのだろうか。

「私も友達がないから…」

未来は悲しげに続ける。咲良はこんなにも明るい未来に友達がいないなんて信じられなかった。

寂しそうに言う未来に、咲良は断れなかった。

「…ああ」

ぱあっと未来の表情が明るくなった。未来は咲良の手を握った。

「今日から私たち友達ね」

「ああ…よろしく、未来」

次の日。約束どおりの時間に咲良は桜の下で待っていた。待ち合わせの時間はとくに過ぎていて、もう夕暮れ時だった。しかし、未来はやってきた。

「ごめんね！うまく抜け出せなくて…」

「別に気にしてない。」

よかったと嬉しそうに隣に座る未来に咲良はほっとしていた。未来と友達になったのは夢だったのか、自分の自惚れだったのだろうか、未来に騙されたのだろうか。考えたくもないことで頭がいっぱいだった。けれど、そんな不安も未来の笑顔を見ると一気に吹き飛んでしまった。

「せっかく友達になったんだからまずお互いを知ることからだよね」
「そう…だな」

未来はうんうん、と頷くと自分を指差して言った。

「まずは私から自己紹介。私の名前は未来。白猫よ。十四歳で父様と兄様の三人暮らし。母様は私が小さい頃に離婚しちゃって顔も覚えてないの。ちなみに父様は猫族の族長。皆父様が怖いから私と遊んでくれないの。だから咲良と友達になれてすっごく嬉しいよ」

未来は悲しげに里を見たあとに咲良に微笑んだ。

「次は咲良の番だよ」

「…名前は咲良。親は生まれてすぐに捨てられたから顔も知らないし、年齢も知らない。拾われた孤児院でもいい思い出はない。でも…」

咲良は桜を見上げた。

「五年前にここで大切だと思える人に出会った。俺のために泣いてくれて、笑いかけてくれて、名前をくれた。その人も去年の冬に死んじゃったけど…まあ、こんな感じ」

咲良は何も言わない未来に違和感を感じ振り向いた。そしてぎゅっとする。

彼女の青い瞳から大粒の涙が零れて、頬を濡らしていた。

「み、未来？」

「ご、ごめんね…っなんか、涙止まんない…っ」

ゴシゴシと一生懸命涙を拭う未来に咲良は動揺した。

「何で泣くんだよ。お前は何も悪くないのに…」

未来は鼻をすすりながら答えた。

「だって、咲良、泣かないんだもん」

「は？」

咲良は未来の言葉に驚いた。

「悲しそうなのに、咲良が泣かないから…だから私が代わりに泣いてるの…っ」

『あんたが悲しそうなのに泣かないから、だから私が泣いてあげてるのよ…っ』

未来の言葉が彼女の言葉に重なった。咲良は未来を抱きしめた。未来は突然のことに驚く。

「な、何！？」

「…ありがとう」

消えそうに囁かれた言葉に未来はクスリと笑って小さくどういたしまして、と返した。しばらくそのままいたが未来が突然ぱっと起き上がった。

「いけないっもう帰らないと…っ」

「じゃあ、またな」

「うん、また明日来るからっ」

咲良は里へ駆けていく未来を見送った。途端に、背筋に悪寒が走る。

何か、良くないことが起きる予感だ。しかし、咲良にはそれが何なのか分からなかった。

それでも心配だったためしばらくは桜の木の根元で本を読んでいた。そろそろ閉じて戻ろうかと思ったそのとき。

『助けて、咲良』

その声が耳に届いた瞬間、咲良は里を目掛けて走り出していた。

助けを呼んでいるのは未来の声だ。近づくに連れて大きくなる未来の声と人々の悲鳴。

咲良には何が起こっているか分からなかったがそれでも未来を探し出そうとする。

「未来ってどこだ!？」

逃げ惑う人々にぶつかり、咲良はその場に転んでしまった。人々の悲鳴が強すぎて未来の居場所が分からない。そこでふと思い出す。

父親が族長。確かに彼女はそう話していた。ならば…

咲良がやっと族長の家に着いたときだった。中から甲高い悲鳴があらがる。

未来の悲鳴だ。咲良は扉を蹴破った。そこには倒れている男性が二人、おそらく未来の父親と兄と未来、そして見知らぬ姿があった。あれは確か…

「狐族!？」

「咲良っ」

残忍で有名な狐族だ。この襲撃は狐族の仕業だった。

狐族の男はにやりと笑うと未来を気絶させた。そして彼女を肩に担ぐと咲良に向って刃物を投げつける。瞬発力の良い咲良はそれを軽々とよけた。

しかし、未来を担いでいた男に気を取られすぎていて背後から近づく仲間に気がつかなかった。

後ろから鉄パイプのようなもので殴られ、咲良は地面に手をつく。意識が朦朧としてきて、咲良はその場に倒れこんだ。

目が覚めると辺りはあんなに騒いでいたのが嘘のように静かだった。
近くに倒れていたはずの族長と未来の兄の姿もない。咲良は朦朧と
する頭で外に出た。

そこには猫族はおるか、狐族の姿もない。里にいた人間はすべてい
なくなってしまったのだ。

咲良は呆然と立ち止まると悔しげに顔を歪ませて近くの壁を殴った。
何度も何度も。拳から血が出てても殴り続けた。

「ごめんな…未来。絶対…絶対に助けてやるからっ」

咲良は里から旅の道具を集めて、未来を助けるための旅に出た。

序章 出会いと別れの春（後書き）

はじめまして、茜雫です。

黒猫の咲良くんは愛しの白猫・未来ちゃんを助けるために旅にでました。

彼の旅を暖かい目で見守ってあげてください。

第一章 知り合い以上友達未満な彼

狐族の下からさらわれた未来… ついでに里の人々を助けるために旅に出た咲良。

しかし、里から出ることを許されていなかった咲良にとってそれは過酷のものであった。

「狐族の里は一体何処だ…」

勢いに任せて出たものの、方向音痴に世間知らずというステータスを持つ咲良はやはり迷っていた。

人に聞こうにも、ここは森の中で人の気配どころか、水音さえしない静かな地。

もう夜も遅いため咲良はついに諦めて座り込んだ。その辺に落ちていた木の枝を集め、石で火をつけて暖まった。

いくら春になったといっても夜は冷え込むのだ。

咲良は寒さで小さくなりながら暖まった。

夜も遅くなり、うとうとし始めた咲良。眠ってしまおうと目を閉じた、その時であった。

「何者だ」

少し高めの澄んだアルト声の人物が現れた。

その声の持ち主はすっぽり被った大きな紺の帽子にゆったりとしたワイシャツ、茶色の革のベストに大きめのぶかぶかのズボンを履いた少女のような少年のような人物だった。

その人物は毛布を頭から被っている咲良の首元にナイフを突き付けて咲良を睨んでいる。

「もう一度問う、何者だ」

咲良はその殺気にため息をついた。そして毛布をとって言う。

「俺は咲良。猫族の里から来た。わけあって旅をしている」

「黒い…猫？」

その人物は大きく目を見開いた。咲良の話信じたのか、ナイフを下し、咲良に忠告した。

「旅するのは勝手だし、言いがかり付ける気はない。ただ一つ、忠告だ。生きて里に帰りたいのならここから先の狼の里に手は出すな。わかったな」

そのまま背を向けて去ろうとする。

「ちょっといいか」

慌てて咲良が声をかけると不機嫌そうにしながらも答えてくれた。

「…何だ？」

「狐族の里は何処にある？」

その質問に相手は固まった。

「狐…だと？」

相手の顔はだんだんと険しくなっていく。何かまずいことほ言っただろうかと咲良は思った。長い沈黙が続き、流石の咲良もどうしようかと戸惑った時。

その人物はその場に膝をついていた。よく見ると右足に血がにじんでいた。

「大丈夫か…！？」

咲良はこれに驚き、駆け寄った。触ろうとした手は振りほどかれた。

「…触る…なっ」

『触るな、化け物めっ』

その言葉が昔罵られた言葉と重なる。咲良は振りほどかれた手を戻し握り締めた。

（俺は誰にも必要とされてない…）

「…悪いが…少し…横に…させて…もらっ。」

咲良の内心を知らず、そう言ってその場に横になった。

やがて落ち付いてきた呼吸から相手が眠っていることに気付き、咲良は右足の手当てをして自分の毛布をかけてやった。

翌日、咲良の目が覚め、その辺にあった木の実を採ってかじっていると、相手が起き上った。

「…はよ。」

声をかけると、気づいていなかったらしく、驚いた顔をしていた。

状況を把握したらしく、小さく頭を下げた。

「昨日は済まなかった。怪我のせいで気が立っていたようだ。俺は荒獅あらしという。人を探してるんだ」

荒獅は申し訳なさそうな表情を浮かべてぼそりと言った。

「人を…？」

「ああ。俺たちは旅をしていたんだが色々あつてはぐれてしまったんだ。その時に少し怪我をしてな…」

荒獅の右足は咲良が治療したものの、酷い出血と骨折で、到底歩き

回れるものではなかった。荒獅は悔しそうに顔を歪めた。

「その仲間とどこで別れたんだ？」

「森の中だ。ふもとの人間の街で待ち合わせしてるんだ」

「…街まで連れて行ってやる」

咲良がそういうと荒獅は驚いた顔をして首を横に振った。

「そこまで親しくなった覚えはないっ」

「困った時は助け合うものだと言っていた。それに俺には狐族の情報が必要だ。街に行けば多くの情報が入るだろう？」

そういうと荷物をまとめ、荒獅を軽々と背負った。荒獅は不満そうだったものの、大人しくしていた。

そのまま森を突き進んでいく。ふと荒獅は聞いてみた。

「なあ、なぜ狐族を追っている？」

その質問に咲良は無表情で答えた。

「里がやられた。別に里に未練はない。ただ…」
「ただ？」

「守れなかった子を助けたい。その子が望むなら里の人々も助ける」

そう呟くように言うと、荒獅は黙り込んだ。しばらく二人とも黙りこんでいたが、荒獅が再び口を開いた。

「もう一つ……いいか？」

「ああ。」

「……どこへ向かってる？」

咲良はその質問の意味が良く分からなかった。なにせ荒獅のために山くだりをしているのだ。

「ふもとの街」

当然のように答えた咲良に荒獅は大きいため息をついた。そして頭を抱えて言う。

「街は反対方向だ」

...

やっと街にたどり着いた時、もう昼になっていた。

普通ここに来るまでに二時間もあれば楽勝なのだが、咲良の場合、倍の四時間もかかった。

「たく…方向音痴なら先にそう言え。無駄に時間を使っただろうが！」

「…悪い。里の周辺から出ること許されてなかったから…」

その答えに荒獅は渋い顔をした。咲良が里で酷い扱いを受けていたのはその言動で分かる。

「…まあいい。送ってくれたことに変わりはないからな。仲間もまだのようだし、少しは情報集めを手伝ってやる。俺は遠くのほうを探すから、お前は近くを探せ。また迷子になられても困るからな」

そう言うつと荒獅は歩き出した。何とも言えない、苦痛の表情で。

もちろん背中しか見えていない咲良にそれは分からず、近くの店などを回って聞き取りに行った。

猫族はあまり人間の地に行かないため、物珍しげに見られる。しか

し咲良にとってそういう目で見られるのは慣れていたから特に気にはならなかった。

老若男女聞き取りを行うものの、それらしい情報はない。

「狐え？この辺じゃ聞かないねえ」とか、

「知らないなあ」とか、

「猫さんかわいいー」とか（笑

とくに役に立たないものや、知らないという人ばかり。いい加減イラついてきた咲良はとりあえず近くのカフェで一服することにした。通り過ぎる人々を見てため息をつく。

「荒獅の方はどうだろう…？」

ふと呟くと、隣でガシャンという音がした。

驚いて目をやると、コーヒークップを割ったらしいその人物は咲良の胸倉を掴んできた。

「今、荒獅って言ったよな！？荒獅は何処にいる！？」

咲良は掴みかかってきた青年を見てこいつが荒獅の仲間だと考えた。

耳と尻尾の形から見て狼族に違いないだろう。

（こいつ…どこかで見たことあるような…）

胸倉を掴んでいた青年も茫然と咲良の顔を凝視していた。

その様子に少し不機嫌になり、咲良は青年を睨みつけた。

「なんだよ。」

低めの声で言うと、青年は手を離し両手を咲良の肩に置いた。

「やっぱお前“黒”（くろ）だろ!？」

青年が嬉しそうに咲良を揺する。

揺すられながらも、咲良は記憶の中で自分を黒と呼ぶ人物を探し出

す。そして見つけた。

「は…やて？」

問いかけるように咲良が呟くと疾風はやてと呼ばれた青年はまた嬉しそうに頷いた。

金色のしっぽも喜びを表して左右に動いている。

「久しぶりだなあ。元気にしてたか？」

「ああ。まあ…」

咲良は放っておけば延々と昔話をしだしそんな疾風をどう止めるかと悩み始めたそのとき。

「咲良。いい情報が…って…疾風!？」

タイミングよく荒獅が店に入ってきた。そして疾風の姿を見て安心したようにため息をつく。

疾風も荒獅の姿を見てよかった!と飛びつくものの、荒獅の強力な拳によって殴り飛ばされた。目の前で繰り広げられたことに咲良

は茫然と固まった。

「俺がどれだけ心配したと思ってんだバカ!!」

荒獅は周りの目も気にせず疾風を怒鳴りつけた。

「悪い悪い…」

「咲良に助けられなかったらこうしてここに来ることもできなかったんだぞ!!」

「咲良…?」

聞き覚えのない名前に疾風は首をかしげる。はぁ、とため息をついて咲良が答える。

「俺の名前だ」

「へ?」

咲良がそう言うのと、今度は疾風がマヌケな声を出した。そしてその場に立ち上がると咲らの前まで歩み寄る。酷く嬉しそうな顔だ。

「お前、ついに名前もらったのか?」

「あの後拾ってもらった人に…な」

「よかったなあ…俺ほんと驚いたんだぜ?俺と同じ年くらいのガキ

が名前はないとか言いやがってよ」

彼女と暮らしたす一年前、つまり咲良が十二歳のときのこと。

いつものように暴力をふるわれて森に逃げ込んだ咲良は運悪く人間のハンターに見つかった。いつもの咲良なら返り討ちにするものの負傷して弱っていた咲良は意識を失ってしまったのだ。

それを助けたのが疾風とその妹、光琉^{ヒカル}だったのだ。名前のなかった咲良のことを二人は黒、と呼んでいた。

「知り合いなのか？」

話の见えない荒獅が不思議そうに二人を見た。

「ちよつと昔ね」

「なら話は早いな……」

「「は？」」

荒獅はニツと笑って続けた。

「手に入った情報で、狐族に俺の探しものがあるって話を聞いたんだ。そこまで一緒に行くのはどうかと思ってる。どうせ咲良は一人

で行こうとしても迷うだけだろうしな」

「俺はもちろん賛成だけど」

荒獅の提案に疾風が素早く賛成した。

しかし咲良は少し迷っていた。

自分が行っても足手まといになるだけだとは思うが、荒獅の言うとおり一人で向かおうとしてもきつとたどり着けはしなと思うし、着けたとしても何年かかるか分からない。

そう考えると答えは一つ。

「…世話になる」

咲良の言葉に二人はにっこり笑った。そしてふと気付く。

店主の苛立った顔に、他の客の好奇と恐怖の視線…そして目の前に疾風が突っ込んだことで壊れたテーブル。

「…すみません」

三人は同時に頭を下げた。修理費を出して店を後にし、疾風がとつたという宿に向って歩いている合間に荒獅が集めた情報を話した。

「狐族は一定の場所に里を持たない移動民族だ。情報だと、この二つ先の街で狐族が発見されてる」

「…すごいな、俺が聞き取りしても全然集まらなかったのに」

「あ…当たり前だろ！？俺はお前みたいに抜けてないからな！！」

咲良の一言に荒獅は腕を組んで言う。疾風はその様子にため息をつきながら言う。

「荒獅、もう少し女らしくしたらどうだ？そんなんじゃ嫁の貰い手がないぞ？」

「うるさい！大きなお世話だ！」

「まあ、貰い手がないなら俺が貰ってやるけどな」

疾風の言葉に荒獅は顔を真っ赤にして口をパクパクしている。荒獅と疾風のやり取りに咲良が茫然と立ちすくむ。不思議に思った二人も立ち止まり、咲良を見た。

「どうした…？」

「お前…女だったのか…」

咲良が呟くように言うと、荒獅は不愉快そうに顔を歪めた。そして怒鳴る。

「文句あるのか!？」

「いや…ない。早くいこう」

二人を背に歩き出した咲良。しかし…

「黒お?宿こつちだけど…」

「
…」

咲良は無事に狐族を見つけることができるのか？

第一章 知り合い以上友達未満な彼（後書き）

疾風は咲良くんの命の恩人であります。

一応知り合い以上友達未満というポジションだったのですが今回のことで友達二号に昇格です。

第二章 親友ができました（前編）

次の街にたどり着いた咲良、荒獅、疾風の三人。荒獅の足の傷も良くなり、順調に旅は進んでいた。

「なあなあ、もう飯にしないか？」

「まだ十時だ。それに疾風はさつき食っただろう!!」

腹が減ったと頬を膨らます疾風と、それを怒鳴りつける荒獅を見て咲良は毎回毎回懲りないなあのため息をついた。

疾風は体格も顔も性格もいい方だし、おまけに女子には優しいため里の中ではかなり持てる方だった。

荒獅も荒獅で美人なため、黙ってさえいれば簡単に騙されるだろう。

そんな二人が街のど真ん中で喧嘩をしていれば当然目立つはずで…。周りの目が痛い。

鈍感で世間知らずな咲良にも、その視線の意味は分かった。

流石に止めなくちゃまずいかなと思い、声をかけようとしたその時。何かが駆け抜けてきた。

「退いて退いてー！！」

走りこんできたのは黄色いドレスを着た少女だった。

赤みがかった長い金髪をポニーテールにしている、身なりを見るといい家の令嬢だということが分かる。少女は人々を駆け抜けて走り去って行った。

そのあとを黒いスーツの男が五人ほど追っていく。

「ありやあ吹雪様^{ふぶき}じゃねえか。また屋敷を抜け出したのか」

「まったく、あのおてんばお嬢様は」

「だけどあれじゃなきゃ吹雪様じゃないわ」

少女の名は吹雪というらしく、この街に住む女公爵のご令嬢。後ろの男たちは彼女のボディガードなのだが彼女は付け纏われるのが嫌でいつも振り切るうとしているらしい。

ただの家出娘か、と荒獅は思った。

「…行くぞ」

馬鹿馬鹿しいといった表情でそう言った荒獅。しかし、疾風はバツが悪そうに頬をかいた。

「あ…あのさ、荒獅。黒がいないんだが…」
「はあ!？」

その頃。

「…そろそろ手、放してくんない？」

「あなたねえ！かわいい女の子が男たちに追われてるのよ！？見捨てる気！？」

「別に俺には関係ないし」

逃げていた吹雪にとっさに手を掴まれて連れてこられた咲良。

しかも、吹雪に訳も分からず助けろと言われ、少し不機嫌である。

「まったく、最近の男はだらしないんだから。お母様の言うとおりだわ」

吹雪が怒っている最中にも男たちが追ってきた。吹雪はささつと咲良の後ろに隠れた。男の中の一人が吹雪に手を差し伸べた。

「見つけましたよ、姫様。さあ私たちと参りましょう」

「おい、その小僧、その方をこっちに渡せ」

「い・や。誰があなたたちと歩くもんですか！」

吹雪はべーっと舌を出した。

それを見た一人の男の頭に血が上り、吹雪に近づいてくる。

「この小娘がいい気になりやがって！」

「きゃあっ！」

流石の咲良もこれには目を見開く。

「おいっやめろ！！」

吹雪に殴りかかろうとしたその時。

「
…やめなさい」

男たちが来た方の通路からうす紫色の長い三つ編みの青年が歩いてきた。ゆっくりと近づいてくる姿はとても優雅でそれなりの教養があるのが分かる。

「し…紫苑様^{しおん}!!」

「紫苑!!」

吹雪が嬉しそうに紫苑と呼ばれた青年に駆け寄る。

殴りかかろうとした男は思わぬ人の出現に一瞬固まったが吹雪が動き出したことに気付き、吹雪の腕を掴んだ。

いや、正しくは掴もうとした。

「どうでもいいが、喧嘩は余所でやれ」

殴りかかろうとした男の伸ばした手を咲良がひねり上げていた。咲良はため息をついて痛がる男を冷たい目で見ている。

仕方なくその手を離すと男は走って行った。

「紫苑！迎えに来てくれたのね！」

「まったく、世話の焼ける我儘姫ですね。奥様が嘆いていらしたよ」

奥様、という単語に吹雪はバツの悪そうな顔をした。

紫苑と呼ばれた青年にボディガードの一人が近寄る。そして頭を下げて話す。

「申し訳ありませんでした、紫苑様。私の監督不足で姫様を危険な目に……」

「貴方のせいじゃありません。ですが…次にお嬢様に危害が及ぶことになったら嚴重な処罰を下します」

「…はい」

「紫苑、これは私が勝手に抜け出して相手の気に障る事言っただけで、この人は悪くないわ」

「わかってます。こうでも言わないと貴女はまた抜け出すでしょう」

ブツブツ文句を言っている吹雪を無視して紫苑は咲良に近づいていく。咲良もそれに気付कि、紫苑を見た。

「お嬢様を助けてくださり、ありがとうございます。吹雪お嬢様の世話係の紫苑と申します」

紫苑は手を差し出したが、咲良はそれを無視した。

「ちょっと、失礼じゃないの」

紫苑の後を追いかけてきた吹雪が怒ったように言う。咲良はそれを横目で見てため息をついた。

「…咲良だ」

仕方なさそうに手を握り返した咲良に吹雪が満足そうにっこり笑

った。

「咲良、咲良ね。それじゃあ咲良をお礼に家に招待してあげる！」

「いや…仲間が探してると悪いから…」

「それじゃあその人たちも探しましょ。ね、紫苑、いいでしょ」

「ええ。もちろん。お嬢様の恩人ですから」

その後、吹雪と紫苑、咲良の三人で荒獅と疾風を探しに出た。

探す、といっても見当もつかないうえに方向音痴の咲良のせいで半分観光になってしまっていた。

そして約二時間後。

「あー！！やっと見つかったぜ、黒！」

聞き覚えのある声がして振り返るとそこには疾風が立っていた。咲良もほっと安堵の笑みを浮かべた。

「もう荒獅がめちゃくちゃ怒ってるぜ。また迷子になりやがったつて。で、そちらさんは？」

「私は吹雪よ」

「吹雪お嬢様の世話係の紫苑と申します。咲良様に吹雪お嬢様の危ないところを助けていただいたので、お屋敷にご招待しようと考えております。咲良様のお仲間もよろしければ一緒に」

「マジ！？よかったあ宿取れなくて困ってたんだよ」

「疾風？咲良は…」

疾風を追って走ってきた荒獅がバツの悪そうにしている咲良に目線を映す。そして怒鳴りつけた。

「咲良！！お前ももう少し迷子直せ！！そして勝手にいなくなるな！！探す方の身にもなれ！！」

殴りそうな勢いの荒獅を疾風がまあまあと押さえつける。吹雪と紫苑に気づいた荒獅に紫苑が気を利かせて名乗り出た。

「私、こちらの吹雪様の世話係の紫苑と申します。咲良様には吹雪様を助けていただいたのです。その上私共がお引き留めしてしまい、ご迷惑をおかけしました。まことに申し訳ありません」

「そ…そうなのか…？」

咲良に問いかけると首を縦に振った。すると荒獅は大人しくなって謝った。これまでのいきさつを説明し、吹雪の屋敷に止まることを

説明すると荒獅もそれを了承した。

「えっと…こっちの金髪が疾風で、こっちの茶髪が荒獅。ちなみに女」

「ちなみには余計だ」

「あつ…あの、私、吹雪って言います。お…お姉様とお呼びしてもよろしいですか!？」

吹雪がさっきとは打って変わった反応で荒獅に話しかけた。そのキラキラとしたオーラに荒獅も戸惑いながらも首を縦に振る。

「あ、ああ…かまわないが…」

「ほんとですか!？ありがとうございます、お姉様!」

それを見ていた疾風が咲良に言う。

「なに、あれ」

「さあな…」

「吹雪様は大人な女性に憧れていらっしやるんですよ」

紫苑が苦笑いしながら答えた。それに…と悲しそうな顔をする。

「私の死んだ姉もそうでした。お嬢様も本当の姉のように慕っておられたので…」

疾風は気まづくなったため、顔をそらし、咲良はじっと嬉しそうな吹雪とそんな吹雪に戸惑う荒獅を見つめていた。

その後、吹雪の家に招待された三人は手厚い歓迎を受けた。

「いくら何でもやりすぎじゃないか？」

不安になってきた疾風は隣の咲良に小さく声をかけた。

しかし、咲良はなんともないといった風に首をかしげる。

唯一まともに話を聞いてくれる荒獅も今は吹雪が独占しているため離せない。しかも荒獅も満更ではないようで、質問にすらすらと答えている。

疾風はため息をついた。目の前には豪華な料理が並んでいるが、手をつける気にもなれない。

理由は隣の咲良がものすごいスピードでものすごい量を掻き込んでいるためである。

「お前よくそんなに食えるなあ」

「…食えるときに食つとかないといつ食えるかわからない生活だったから。」

（ため食い…冬眠前の熊か、こいつ）

その食べっぷりは細い体のどこにそんなに入るのかと不思議になるくらいだ。

本気でどうしようかと疾風が迷っていると、一人の女性があわてたように入ってきた。

の女性はさらさらとした長い金髪にオレンジに近い金色の瞳をしたとてもきれいな女性だった。

女性は吹雪の顔を見るなりその美しい顔を崩して吹雪にだきついた。

「吹雪ちゃん!!どーして帰ってきたのにママに何も言ってくれないのぉ!!」

「う…ご…ごめんなさい、母様」

女性に泣きつかれた吹雪はうろたえながら謝った。

見かねた紫苑が女性を落ち着かせるまで約二十分。

ようやく落ち着いた女性は自己紹介を始めた。

「お恥ずかしいところをお見せいたしました。吹雪ちゃんの母の弥生^{よい}と申します。公爵という地位をいただいております。吹雪ちゃんを助けていただいて本当にありがとうございます」

「…いえ」

「お招きありがとうございます。俺は荒獅です。こっちの金髪が疾風、黒いチビが咲良」

「チビゆうな…」

仕返しとばかりの荒獅の紹介に不満げに咲良が呟いた。

「母様、朱音^{あかね}は？」

「朱音ならお外にいるわ」

「まったく、紫苑の弟とは思えないわね」

むっとした吹雪の背後から声がかかった。

「悪いかよ」

声のした方を見ると赤茶色の短髪の少年が立っていた。

髪に隠れた左目は赤色でと逆の右目は澄んだ青色をしている。

「朱音、いくら幼馴染でもお嬢様にそんな口を利いてはなりませんよ」

「…わかってるよ」

朱音と呼ばれた少年は不機嫌そうにしながらも夕食の席に着いた。

朱音は咲良たちを見ながら不満そうにつぶやく。

「いつら誰？」

「こら、朱音！！お姉様達は私を助けてくださったのよ！」

食ってかかる吹雪。

「へーこんなチビがねえ」

朱音は咲良にホークを向けて挑戦的に見る。咲良もまたチビ発言に不機嫌になった。

「…そういうあんただってチビじゃんかよ」

言い返された咲良の言葉に朱音は青筋を立てた。朱音は澄まし顔の咲良の胸倉を掴んで怒鳴りつける。

「あ？それ、誰に言ってるんだよ！！」

「…あんたに決まってんじゃない」

朱音は飄々としている咲良にまたもや血が上り、思いっきり咲良を殴りつけた。

殴られた咲良は壁に叩きつけられた。吹雪と弥生が悲鳴を上げる。

「黒！！大丈夫かよっ！」

「…平気だ、このくらい慣れてる」

口に垂れている地を手の甲で拭いにとって咲良は立ちあがった。その瞬間、乾いた音が響く。

「いい加減になさい！」

音の先には左頬を赤く染めて呆然と立ち尽くしている朱音とその朱音に冷たい視線を向ける紫苑の姿があった。

「なんでも癪癢を起して、自分の思い道理にならないと気に入らない。そんなの小さな子どものことでしょう!？」

「…兄貴に分かるかよ!! 他人同然のあんたに俺のことなんて…わかんねえだろっ」

そう言つて朱音は飛び出していった。辺りは静まる。咲良はまた地面に座り込んだ。

(あいつ、俺と同じ匂いがした…)

「弟がすみませんでした、咲良様。お怪我は大丈夫でしょうか」

「…ああ」

しばらくして、吹雪と弥生、荒獅、疾風の四人は部屋へと戻って行った。紫苑は朱音が暴れて散らばった食材や割れた食器の後片付けに入った。

「…一つ、聞きたいことがあるんだが」

「何でしょうか、咲良様」

手を止めることなく紫苑は答えた。

「あんたたち、ほんとの兄弟じゃないだろ」

紫苑の手がピタリと止まった。紫苑は寂しげに微笑む。

「…ええ、そうです。私と朱音は血のつながりなんてありません。私の家は、代々このお屋敷に使える下級貴族でした。私はその家の一人息子として大切に育てられました。朱音が家に来たのは、私が十歳のころです。父の話だと、古い知り合いの子どもでその方が亡くなり、引き取るようになったということでした」

紫苑は静かに話を続けた。

「私も姉も本当の弟ができたようで嬉しかったのですが、朱音は心を開いてくれることはありませんでした。なんでも…実の両親に虐待を受けていたそうです」

（やっぱり…そうだった。あの目は他人を全く信じてない目だった。）

「今日は本当に朱音が失礼なことをしました。ですが…よければあの子と仲良くしてくださいととても嬉しく存じます」

ゆっくり苦笑しながら頭を下げた紫苑に、咲良は小さくうなづいた。

親友ができました（中編）

次の日、咲良は弥生の悲鳴で起こされた。低血圧な咲良にとって朝に聞く女性の悲鳴ほど迷惑なものはない。

「…何があつた？」

咲良は不機嫌さなるべく抑えて、近くにいた荒獅に問う。

「吹雪が何者かに連れ去られた。手掛かりはこのメモ、だな」

咲良は荒獅の手にある髪を覗きこんだ。それは脅迫状というやつで、莫大な大金が書かれていた。弥生が泣き崩れる。そこへ丁度朱音がやってきた。

「何やってるわけ、朝からうるさいんだけど」

何を思ったのか、朱音を見るなり弥生が詰め寄る。

「あ…あなたでしょう！こんなことしたの！！貴方前々から私のことを気に入らなくて…っ吹雪ちゃんを誘拐なんて馬鹿な真似したん

でしょう!!」

「吹雪が…誘拐？」

朱音は信じられない、といった風に繰り返した。

「とぼけないで!!」

「とぼけるも何も、何で俺なんだよっ」

うろたえる朱音に錯乱状態の弥生は残酷な一言を浴びせた。

「貴方なんて雇わなきゃよかった。貴方なんて…生まれてこなければよかったのにつ」

『あんたの母さんいっつも言ってたよ。あんたなんて産まなきゃよかったってね』

咲良は自分の腕が震えだすのを感じた。朱音は傷ついた表情で走り去る。暴れる弥生を紫苑が必死になってなだめた。

「おい、大丈夫かよ、黒。お前震えて…」

疾風が心配して手を伸ばしたが咲良は無意識の内にその手を振り払っていた。

そして咲良も駆け出していた。

「おいっ咲良!!」

「黒…」

疾風が追いかけようとするが紫苑が疾風の肩を掴んで首を横に振った。

「私が行ってきますので皆さんはお嬢様のことをお願いします」

紫苑はそう告げると部屋を後にした。

その頃、落ち着くまで中庭をふらついていた咲良は噴水の近くで蹲っている赤い髪を発見した。

近づいていき、声をかけてみる。

「おい」

「…なんだよ」

顔を上げずに朱音はそう答えた。

「…お前、親に酷い目にあってたんだってな」

「同情なら要らない。逆に気分悪くなんだよ。さっさとどっか行け」

朱音の脇に咲良は腰を下ろした。それに気付き、朱音が声を荒げる。

「どっか行けって言うてんだろ！！生ぬるい同情なんていらねえン

だよー!」

「…同情じゃない。俺も、お前と同じだった」
「は…?」

咲良は耳を隠していたバンダナを外した。猫耳は目立つからと疾風のくれたバンダナだ。

「黒い…猫?」

「…俺は猫族だ。猫族では黒猫は不吉の象徴とされていた。生れてすぐ親に捨てられて、孤児院でも酷い扱いを受けてきた」

「つらく…なかったのかよ」

「つらかった。俺が何したんだっていつも考えてた。でも、誰も話なんて聞いてくれやしなかった。そんなある日、女神のような人に会った。俺を…闇から救いあげてくれた」

朱音は熱心に咲良の話を聞いていた。

「その人は…?」

「死んだ。去年の秋のことだ」

「…俺にはそんな人、いなかった。いつも一人だった」

「違う。お前には兄貴も、吹雪もいるだろ。今からでも、遅くないんじゃないのか」

咲良の言葉に朱音は一瞬驚いた顔をしてからそうだな、と笑ってうなづいた。

「あんた、名前は？俺は朱音ってんだ」
「咲良」

朱音は年相応の笑みを浮かべる。

「あんたとはいい友達になれそうな気がするよ。咲良」
「ああ。俺もそう思うよ」

二人で夕食に向かおうとしていると、ひそひそと話している声が聞こえた。朱音にシツといい、建物の陰に隠れる。

「な…なんだよ、あれ」

小さい声でうろたえる朱音。咲良はじつと様子を窺う。

「…吹…の…す、ど…だ？」
「い……じ…」

咲良はかすかに聞こえた吹雪、という名前とどう見ても怪しい背格好の二人にあれが誘拐犯かと納得する。

そして後ろの朱音に言う。

「朱音、疾風と荒獅…金髪と茶髪呼んで来い。あいつらが誘拐犯だ」

「はあ！？何言ってるんだよっ二人で戻れば…っ」

「二人で戻ったらあいつらのアジトが分からなくなるだろうが！」

しびしびと頷いた朱音が走り出したのを確認し、もう一度様子を確認しようと二人の方を見た。

その瞬間、頭に激痛が走る。

「つつ…」

薄れていく意識の中で咲良が最後に見たのは薄い紫色だった。

朱音は咲良を置いてきたこと少し気にしつつも、皆が待っている部屋まで走ってきた。

部屋の前でふと止まる。

きつとまだ弥生は朱音がやったと思っているだろう。

もしもまた、精神的にきついことを言われたら？立ち直れるだろうか。

朱音は部屋の戸に手をかけたまま考えた。でも今は咲良の言うことを実行しなくては…。

覚悟を決めて朱音は扉を開いた。そして大声で叫ぶ。

「金髪と茶髪の奴！！咲良が犯人見つけた！！」

「ほんとかつ！？よっしゃあつ」

「行くぞ、疾風！！」

「待つて！」

駆け出そうとした三人に、弥生が声を上げる。その視線の先には朱音がいる。

「朱音。」

弥生は静かに朱音の名前を呼んで、近づいた。

朱音は少しうつむく。すると、弥生は朱音の手をつかんだ。

「ごめんなさい…吹雪ちゃんを…吹雪ちゃんを助けて…」

弥生は消えそうな声でそう言った。朱音は、その言葉に驚きつつもうなづいて、走って行った。

先程、いたはずの場所に行くと、人の姿は全くなかった。

「ほんとにここなのか…？」

「ここのはずなんだけど…」

朱音がおかしいなあ、と首をかしげると、疾風のアセった声がした。

「おいっこれ…」

疾風の手にあるのは、血のついた咲良のバンダナだった。血の跡が点々と続いている。

「これ咲良のバンダナ…!？」

朱音はそれを見て、心配そうにしていたが、あるものに気付いて屈んだ。

その目線にあったものの正体に気付き、顔を固くした。

「いね…兄貴の…？」

頭がずきずきと痛んで目が覚めた。頭を押さえようとするが、手が動かないことに気付いた。

見ると、手錠が嵌められていて、鎖で繋がっている。

そこで自分が、誘拐犯に連れ去られたのを思い出した。クスリと笑う声が聞こえて、そっちを睨んだ。

「まさかあんたが…犯人だったなんてね」
「驚きでしょう？」

暗闇でもいやに目立つのは薄紫色の髪だった。

「紫苑。馬鹿女に何するつもりだ？」
「復讐です」

紫苑は冷笑を浮かべていた。咲良は繭をしかめる。

「復讐？」

「あの時お嬢様が飛び出さなかったら…」

紫苑は整った顔を歪める。

「姉上はあんなことにならなくてすんだー!!」

紫苑とその姉・翠連すいれんがこの屋敷に来たのは吹雪が五歳の春だった。

当時十三歳だった紫苑と十五歳の翠連は吹雪とすぐに打ち解けた。

しかし、紫苑が十五歳になったばかりの頃に惨劇は起きた。

その日もいつものように吹雪は翠連の後を追っていた。

「翠連姉様。今日の紅茶はなんですか？」

「そうですね…今日は吹雪様のお好きなアールグレイにいたしましょうか」

「本当！？私、翠連姉様の入れるアールグレイが一番好きです！」

翠連は優しい微笑みを浮かべた。

「吹雪ちゃんは翠連が大好きなのね」

弥生もその光景に笑みを零す。吹雪は年相応の無邪気な笑みを浮かべていた。さつと翠連は弥生に紅茶を出す。彼女はこの女主人の紅茶の好みも把握していた。

「ダージリンでございます、奥様」

「あら、ありがとう」

ささやかなひと時。そんな中、チャイムがなった。紫苑が出ようと
して翠連が遮った。

「私が出るからあなたは茶菓子を持ってきて」

紫苑はそれに従い茶菓子を取りに向った。翠連は優雅なしぐさでドアを開ける。下級といえども貴族の令嬢として身のこなしは完璧だった。

「失礼。吹雪お嬢様はいらっしゃいますかな」

客は中年の男性だった。翠連は顔をしかめる。吹雪に直接のようだななんて碌な人間がいないと分かっていたからだ。

「どちら様かは存じ上げませんが、お嬢様は現在手が離せません。お引取り願います」

扉を閉めようとした翠連だが後ろから聞こえた声に気を取られた。

「翠連姉様、お客様？」

気を取られた瞬間、閉めかけられていたドアが無理やりこじ開けられた。十七歳の少女の細腕と中年男性の力を比べれば負けるのは当然。

翠連は壁の方向に叩きつけられた。

「吹雪様っお逃げになって!!」

刃物を持った男の姿に幼い吹雪は動けない。刃物が振りあがる。翠
連は男に背を向ける形で吹雪を抱き寄せた。

ザシュッ

肉に刃物が突き刺さる音。そして、子供の泣き声が屋敷に響いた。

「あの時、お嬢様が玄関にいなかったら…そうしたら姉上はドアを閉めて、死ぬこともなかった」

吐き出すように語る紫苑に咲良はかける言葉がなかった。何よりも大切だったものを奪われた時の気持ちを咲良はよく分かっていた。

「私は…この八年間、お嬢様の無邪気な笑顔を見るのが憎らしくてたまらなかった!!」

親友ができました（中編）（後書き）

親友ができました（中編）です。

紫苑の闇は深いのです。

ちなみに紫苑のお姉さんの名前も今回出しました。お気づきの方もいらっしやるかもしれませんが翠連、紫苑、朱音の三兄弟はすべて色の名前がついてます。

ちなみのちなみに私の知っている紅茶の種類はアールグレイ、ダージリン、オレンジペコ、アッサム、ロイヤルブレンド、アップル…ぐらいであります。

ただ貴族のティータイムということで紅茶を出してみたかった！！それだけです、すみません。

誤字脱字・感想等ありましたらよろしく願います。

飯

「咲良までさらわれるなんて…」

疾風は血のついたバンダナを握り締め、そう呟いた。
荒獅は腕を組んで窓の外を見る。

「とんだ誤算だったな」

連れ去られた咲良の元へたどりつく術がない。

手がかりはこのバンダナだけで、血の跡も途中で途切れていた。
途方にくれている二人の下へ浮かない顔をした朱音が近づく。

「あ、あのさ…」

「どうした、坊主」

疾風が朱音を見ると朱音は意を決したように言う。

「中庭にいたのは最近雇われたボディーガードたちだった。きっと咲良も連れて行った犯人だ」

「新人のボディガード…元々それが目当てでこの屋敷にきたのか、何か不満があつて起こしたことなのかは分からないが調べてみる価値があるな」

荒獅は近くにいた弥生に頼んでボディガードのリストを取りに行かせた。

朱音はまだ思いつめた顔をしている。

荒獅は朱音の頬をつねると続けた。

「まだ続きがあるんだろ。女公爵に聞かれたくないことが」

疾風の言葉に朱音は視線を宙に浮かばせる。

「思い当たることがあるのなら言ってみろ。早くしないと咲良と吹雪の命が危ないかもしれない」

荒獅の脅しかけるような口調に朱音はビクッと反応する。

そして唇をかみ締めるとポケットに手をつ込み何かを出した。それを真っ直ぐ荒獅に突き出す。

荒獅がそれを受け取り、手の平に転がす。

「指輪？」

女物のシンプルなデザインの指輪だ。

これが何の手がかりだと言うのか分からず、二人は朱音を見た。

「それは…亡くなった姉さんの形見だ。兄貴が肌身離さず持ってた」

「へえ…お姉さんの形見、か…」

疾風がきらきらと光る指輪を荒獅から受け取ると呟いた。

荒獅は少し考えるそぶりを見せてから目を見開いて俯いている朱音の方に向き直った。

「お前、今、この指輪は紫苑が肌身離さず持っていたものだといったな。なら…」

「咲良をさらったのは兄貴だよ。きっと今回の黒幕も…」

疾風もやっと気づき、立ち上がった。

「紫苑が犯人！？だってあんなに吹雪のこと…」

「兄貴は吹雪を憎んでるんだよ、きっと…。まだ吹雪のせいで姉さんが死んだと思ってるんだ!!」

悔しさを隠せない表情で朱音が叫んだ。

疾風はその切ない表情に押し黙る。

荒獅がその様子を見て二人に声をかける。

「身内争いはやめろ。まずは咲良を探すことからだな。行くぞ」

「行くてどこに！？場所はわかんないんだぜ!？」

疑問の声を上げた疾風に荒獅は冷静な声で答える。

「方法なら見つけた」

「はあ？どうやって…」

荒獅は疾風の方に振り返ると疾風の鼻を指差した。

「その鼻は飾り物か？咲良のおいくら拾えるだろう？」

「あら…？ここはどこかしら…」

目が覚めた吹雪はあたりを見回す。窓のないレンガでできた牢獄の
ような部屋。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0921o/>

cherrybrossom

2011年10月8日00時16分発行